

平成 23 年 9 月 20 日

第 83 回海洋フォーラム要旨

世界遺産小笠原、海洋生物の観点からの歴史

特定非営利活動法人
エバーラスティング・ネイチャー
菅沼 弘行

【講演要旨】

小笠原諸島は、古第三紀にあたる 3000 万年前に海底火山が噴火し隆起し、海洋島として歴史上大陸と接したことがなく、動植物は固有の進化をした。その独特の進化が認められて本年 6 月に世界自然遺産として登録された。

小笠原諸島は、徳川家康の命により 1593 年に小笠原貞頼が発見し、その姓をとり小笠原諸島と命名されたと言われているが、貞頼の実在自体が現在では否定されている。1670 年に紀州のミカン船が母島に漂着し伊豆下田に生還、幕府に報告され、これが最初の発見報告と考えられている。この報告を基に、1675 年に幕命により島谷市左衛門が小笠原の調査を行い、「延宝無人島巡見記」をあらわす。その後 19 世紀になり、ジャバングランドと呼ばれるマッコウクジラの生息域が小笠原近海に発見され、欧米の捕鯨船が小笠原に寄港するようになる。小笠原を捕鯨基地にするために 1830 年に欧米系 5 人とハワイ人 25 人がハワイ・オアフ島から父島に入植するが、アメリカ西海岸の金鉱の発見や石油の発見により、その後捕鯨基地としての小笠原は見捨てられることとなる。太平洋の捕鯨基地は、ガラパゴス、ハワイ、小笠原と西進するが、これらの島で繁殖するウミガメ類は、捕鯨船の重要な食料として捕獲され減少し始める。1853 年にアメリカ東インド艦隊司令官ペリーが日本へ行く途中、沖縄を経て父島に寄港する。この時、小笠原を後発したペリー艦隊のマセドニア号は、1954 年に 60 頭のアオウミガメを下田に運び、先発していた艦隊に新鮮な肉を配り、大いに賞味したという記録がある。ウミガメは爬虫類であり、船の甲板に裏返して置いておくと、半年以上餌がなくとも生きており、常に新鮮な肉を提供してくれる。1862 年に幕府は外国奉行水野忠徳らに命じ、咸臨丸で小笠原に派遣させ測量を行い、父島、母島、聳島の地名がこの時に命名される。1876 年(明治 9 年)に、小笠原諸島は日本領土となり、主に八丈島の人々を中心とした日本人 37 名が父島に定住する。当時はまだ細々と捕鯨船が小笠原に寄港し、アオウミガメが販売され、島民一人あたりの捕獲頭数は年間 20 頭までと制限された。

1492 年のコロンブスのアメリカ発見は、大航海時代の幕開けとなり、世界で 7 種生

息するウミガメは食用として捕獲されることとなる。さらに、1650年頃に大西洋で始まったアメリカ式沿岸捕鯨は1789年に太平洋に進出し、これとともにウミガメ類は激減する。1876年(明治9年)に日本領土となった小笠原では当時産業がなく、ウミガメの捕獲が奨励され、この年に3000頭ものアオウミガメが捕獲されたといわれている。1880年(明治13年)から捕獲が記録され、これは世界でも最長の捕獲統計となっている。しかし、1910年(明治43年)には乱獲により捕獲頭数は500頭を下回り、当時の農商務省は資源回復を試み、世界に先駆け人工ふ化放流事業を開始した。第二次世界大戦が始まる1940年までこの事業は継続されるが、30年間続いたこの事業では残念ながら資源の回復をみることはなかった。敗戦により、小笠原はアメリカの統治領となるが、1968年に日本に返還される。1973年から東京都により人工ふ化放流事業が再開されるが、この事業でも資源の回復は図れなかった。2006年に当法人が受け継いだ、人工ふ化放流事業が資源増殖に効果がないという判断を下し、100年前に開始されたこの事業は2009年に終止符を打つこととなる。

コロンブスから500年余りは、世界的に食用としての捕獲がウミガメを激減させた主要因であったが、この30年ほどの短い間の急激なウミガメの減少は、漁業による混獲、ふ化率を低下させる海岸砂の消失などがその主要因となっている。小笠原では、ウミガメ漁が継続されており、先進国では日本だけが唯一合法的に捕獲されているが、小笠原のアオウミガメ資源は増加傾向にある。また、小笠原ではアオウミガメの産卵や繁殖のために来遊するザトウクジラは、観光資源として脚光を浴びており、1990年に観光産業として小笠原のホエールウォッチングが日本で初めて始まる。このようにアオウミガメやザトウクジラは小笠原の歴史とともに歩んできた。小笠原のアオウミガメは、国際自然保護連合(IUCN)やワシントン条約(CITES)の目的となっている持続的利用(サステナブル・ユース)の好事例であると考えられるのだが、ザトウクジラなどの海洋生物も世界遺産では対象外とされたことは、誠に残念である。

【質疑応答】

Q. エバーラスティング・ネイチャーが「移植」を否定する理由は？

A. ウミガメは性の決定が地中温度によりなされる。産卵後、地中温度28.5度以下の場合はずべてオス、30.3度以上はメス、ということになる。温度を下げることで孵化率は上がるが、下げればすべてオスが誕生することになる。移植すると、移植場所によっては高温により孵化前に死滅することもあるし、すべてメスが誕生することもある。オスが少なくなると受精しない卵が増えるため、孵化しない卵が増えるということになる。遊泳力の弱い稚ガメは潮に流され、卵黄の栄養が無くなる前に餌場である流れ藻にたどり着かなければ餓死してしまう。死亡する稚ガメの99%は餓死による死亡だ。

- Q. ウミガメ減少の理由として混獲があげられるとのことだが、漁業者に混獲を防ぐ協力や提案はできないか？
- A. 現在館山で、漁業者と一緒に活動をしている。定置網にかかったカメに印をつけてもらい、その割合を把握するなどしている。
- Q. 複数あるウミガメ減少の理由のうち、最大の理由はどれか？
- A. 最大の理由は、時代によって・場所によって変わる。現在世界で多いのは漁業に伴う混獲で、その他には日本であれば護岸工事が挙げられる。護岸工事を行うことで海岸から砂が流失し、砂浜の傾斜が直線的になるため波を受けやすく、孵化率が下がることになる。
- Q. 小笠原諸島における産卵巣数は、グラフによると増加傾向にあるが、これはアメリカ統治時代にあまり捕獲されなかったため多いということか？
- A. その通り。保護の結果、増加しているわけではない。
- Q. 現在小笠原では年に 125 頭のペースで捕獲しているとのことだが、大丈夫か？
- A. モニタリングをしてみないと分からないが、小笠原で絶滅することはないだろう。
- Q. 世界遺産指定時、海域拡大の議論があったようだが、海域の扱いはどのような具合だったのか？
- A. 当初海域は含まれていなかった。昨年、国際自然保護連合（IUCN）の視察団が「海域も含めるべし」と判断したため、いわゆる海中公園を含めることとした。

以上